

研究成果情報

平成 28 年度

たまねぎのセル成形苗を用いた春植えによる 6 月下旬～7 月上旬収穫作型

[要約] 秋植え用たまねぎの中生品種を、前年 11 月中旬から 2 月上旬の間には種育成したセル成形苗を用いて 4 月上旬頃までに定植することにより、6 月下旬から収穫できる。

新潟県農業総合研究所園芸研究センター 育種栽培科

連絡先

TEL 0254-27-5555

FAX 0254-27-2659

[背景・ねらい]

たまねぎは、加工・業務用を中心として県内各地域に拡大している。しかし、慣行の秋植え栽培では、天候が安定せず定植遅れによる生育不良や越冬率の低下、降雪のリスク等本県特有の課題を抱えている。そこで、気象条件の安定する春に定植可能な新たな作型を開発する。

[内容]

- 1 無加温ハウス内で直接発芽させる場合は、11 月中旬から下旬には種を行う。発芽までは、2 週間程度である。12 月以降の種は、加温により発芽を揃えてから無加温ハウスに育苗トレイを移動する（表）。
- 2 11 月及び 12 月は種の苗は、3 月下旬から定植可能な苗となり、遅くとも 4 月上旬までには定植する。収穫は 6 月下旬から始まり、中心は 6 月 6 半旬となる（表）。
- 3 1 月上旬から 2 月上旬は種の苗は、4 月 2～3 半旬に定植する。収穫は 6 月 6 半旬から始まり、中心は 7 月上旬となる（表）。
- 4 追肥を含めた総窒素施用量は、秋植え慣行栽培並みの施用量とする。また株間は、りん茎肥大の良い 15cm が適している（図 1）。
- 5 5 月下旬に秋植えと同等程度の生育量とするため（図 2）、生育を見ながら 5 月上旬までに秋植えの春追肥と同量程度の追肥を行う。
- 6 収穫は、ほ場全体で 8 割以上倒伏が確認された時点で実施する。いずれの作型においても、球重は 230～300 g 程度となり、収量は 10 a 当たり 4,000kg 以上期待できる（図 3）。

[導入効果]

- 1 秋植えと組み合わせることにより、雪風害等による減収のリスクが軽減される。
- 2 同一ほ場において、8 月以降の作付けとなる秋作との 2 毛作が可能となる。

[導入対象]

主に県内砂丘地域及び少雪地域のたまねぎ生産者

[留意点]

- 1 種子は、秋植えの場合と同じ時期に準備する。
- 2 土壌の乾燥には十分注意し、5 月以降は積極的なかん水に努める。
- 3 栽培のポイントは「春植えたまねぎ栽培のポイントとりん茎肥大特性（平成 28 年度研究成果情報）」を参照する。
- 4 マルチ栽培の試験は実施していない。また、基肥は普通化成肥料を用いている。
- 5 栽培は、畦幅 140cm、条間 20cm の 4 条植えで実施した。
- 6 規格内とは、りん茎（球）短径 7 cm 以上である。

[具体的データ]

表 春植え作型表

作 型	11月			12月			1月			2月			3月			4月			5月			6月			7月			3年平均			
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	収穫日	SD ^{注)}		
晩秋まき6月どり (無加温)		○	○																											6/26	±3.3
晩秋まき6月どり (発芽時加温)			○		○																									6/28	±5.6
冬まき7月どり (発芽時加温)							○			○																				7/4	±7.0

○:は種 △:定植 □■:収穫(■:中心収穫期)

注)SD:標準偏差

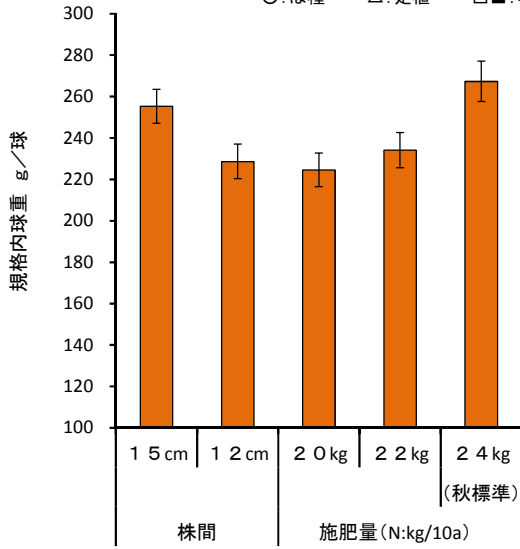


図1 株間や施肥量がりん茎肥大に及ぼす影響 (H27) (砂丘畑 3/25 定植)
誤差線:標準誤差 品種 '七宝甘70'



図2 春植え5月下旬の生育めやす (砂丘畑)
注) 定植: 秋植え (10月下旬) (H26/5/22 撮影)
春植え (3月下旬)

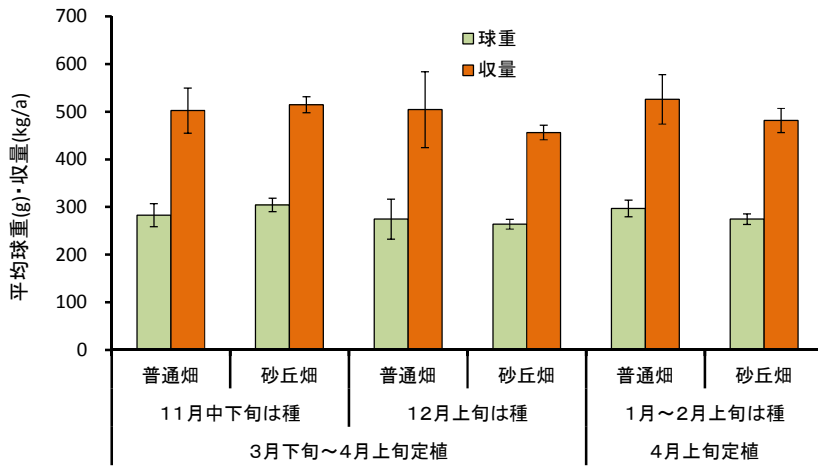


図3 作型別の規格内平均球重と規格内収量 (H25-27 平均)

注1) 288穴規格セルトレイ使用
注2) ハウスベンチ育苗
注3) 栽植密度 (1,900 株/a)
株間 15cm

誤差線:標準誤差
品種 '七宝甘70'

[その他]

研究課題名: 最近の野菜流通に対応した加工・業務用たまねぎの高位安定生産技術の開発
 予算区分: 県単政策 (複合営農支援技術開発)
 研究期間: 平成24~27年度
 発表論文等: 平成26年度園芸学会東北支部大会